瑠璃色の刹那

Luna

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
瑠璃色の刹那

【Ｎコード】
Ｎ４４８９Ｄ

【作者名】
Ｌｕｎａ

【あらすじ】
何も無い日常に退屈していた一人の高校生。何かおきないかと願望していたその日、ある少女と出会う。ギャグ有りの恋愛物語。少年は、無事少女に告白できるのか…？

第1話　瑠璃色の少女

いつの間にか、僕は高校生になっていた。
何もない日常。僕はそれが退屈でつまらなかった。

何か面白いことが起こらないのか・・・と。

しかしあの時…僕にとっての全てが変わった。

それは5月の時…。
ジリリリッ！
「ん…。こんな時間か。」
いつもの変わらない朝。
あくびをしながら階段を降りていく。

「おはよう。母さん。」
「あら、おはよう。」

素早く朝飯をすませ、学校の支度をする。
「う～ん、暇だなぁ。」
時間が無いので、走って登校する事にした。

しかし、いやな予感がした。どうやら当たっていたようだ。
「いたッ！・・・いてて。」
「ん？なんだてめぇ？」
どうやら他校の不良だったようだ。こういうの苦手なんだよな。
どうしよう。
「これでもくらえや！」
持っていた木刀を振り下ろす。人生の終わりかと思った。だが…。

バシィ！！
「・・・？」
一瞬目の前が真っ暗になった。がしかし体は何ともなく、僕の目の前には少女が立っていた。
瑠璃色の髪した少女。素手で木刀を受け止めていた。
「何ィ…。クソッ覚えていろよ！」

少女はハァ、とため息をつく。
「・・・痛い」
「だ、大丈夫か？」
少女は僕の方を見つめた。蒼色の瞳。
「・・・。」
「…あの～見えてます…。」
「！！！！」
少女は真っ赤になって、走っていってしまった。まあ、当然か。

「やばい、こんな時間か。」
本気で走って、無事に着く。

「お。おはよ～う。蓮。」
「ハァハァ…。おはよう…。裕綺。」
「どうした？ハァハァ言ってぇ。お前、もしかしてぇ…？」
「違うわ！！ニヤニヤすな！」
学校に来ているのは親友に会う為と言ってもいいくらい。

「いいえ、登校中になにかあったよね？お姉さんに話してみて☆」
「か、楓先輩・・。また来たんすか。というか、読心術使えたっけ？」
「使えるわけ無いじゃん。女のカンってやつだよぅ」

女のカンて何だよ、男のカンは無いのか？

「あのね、登校中に他校の不良とぶつかってしまってさ。」

「うんうん。目付けられたんじゃ無いの？」

「そりゃ大変だねぇ」

…反応速いよ。まあ続き。

「そしたら、一人の少女が助けてくれてさ。」

「おお、カッコいいねぇ。」

「そして一目惚れ？」

…何故そういう反応が出来る。

「ん、そういや先輩の制服見て思い出したんだけど、あの少女もこの制服してたような・・・。」

「な、なんだってー！そりゃさがしに行かなくちゃな！」

「うんうん。なんせ一目惚れだしねぇ～。」

いいかげんにしろよ・・・。

「今は時間無いから、一限目終わってから行こう。」

「了解だぜ。」

「りょ～かいっ」

一限目が終わったので、探しにいく事にした…。ていうか何故僕まで。

「多分あの小柄、一年だろうな。」

「おお、同学年。特徴は？」

「瑠璃色の髪。蒼色の瞳。」

「むむ。何かデジャブが・・・。」
さっきまで文句を言っていた俺もノリノリに洗脳されてしまったようだ。

「ん～。あの子じゃない？」
「お、先輩合ってますよ。しかし速いな。」
「ん？だってあの子知ってるもん」
「な、もしかしてあの子か！？」
隣にいる裕綺が騒ぐ。もしや…。

「おお、なかなか可愛いじゃないか。ちょっと行ってくるぜ。」

「やめろ。」

第2話　瑠璃色の恋

「それじゃ、蓮君ガンバレ！」
「栄光をつかみ取るんだ！」
栄光って何の栄光だよ。
「やれやれ、何でこんな事…。」
少女の席へ近づく。

「ん」
「・・・さっきはどうも」
「えっと・・・だれ？」
おいいい！！

「いや、朝助けてくれたじゃん。」
「ん・・・そういえば。…何か用で？」
「あ、ありがとうっていいにきたんだよ。」
照れながら言う。しかし。
「・・・邪魔だったので、どかしただけ。別にお礼されるような事はしてない…。」
そう言ってそっぽむいてしまった。

「・・・あれ？」
「・・・・・・」
少し、考え込む。
「あ～・・・時間ないんでもう行くわ。」
「ん・・・またね。」
・・・ん？なんか…。

「・・・終わったぞ？」

２人はがっかりした顔をしていた。
「あのな。なんでもっと攻めないんだよっ！」
「せっかくいいところだったのにぃ！」
「はぁぁぁぁ！？」

そっぽむいんたんだぞ？どうしろってんだ。ていうか、こいつらバカか？
うん、バカって自信もって断言出来るな。
「いやさ、怒ってるのかと…。」
「いやいやいや、あれは照れてるんだよ。」
「へ…。」

「彼女は…素直じゃないんだろうな。気付かなかったのか？出て行くとき、笑っていたぞ。」
あ・・・確かに。何かおかしいと思ったら、笑っていたんだな。

彼女の笑顔…可愛かったな…。

昼休み…。
「・・・なんでまたここにいるんだよ。」
「いいじゃんいいじゃん♪リベンジってことでー」
「俺もサポートするぜ。」

昼休みになったとたん、僕と裕綺は先輩に誘拐されたしまったのだ。
で、連れて行かれたのは彼女のクラスだった。
「・・・この人達は？」

「ああ、僕の親友と先輩。いつも楽しいんだぜ。紹介するよ。」
って何とけ込んでんだ俺ー！？
「俺は東乃　裕綺っていうんだ。よろしくな。ところでスリーサ」
「それは置いといて、私は2年の西園寺　楓。よろしくねぇ～♪しかもクラスではモテモ」
「それは置いといて、僕は夜月　蓮。この2人がバカですまない。」
「誰がバカだ！」
「裕綺さん、楓さん…蓮。私は紅　刹那。」
何故僕だけ呼び付け。刹那…名前に合わない顔だなぁ・・・。麗魅とか期待してた。
「まあまあ、そう暗い声出さないで、元気出していこうよっ」
「先輩は面白い方ですね。」
何故そう反応する。
「まあとりあえず、よろしくな。刹那。」
相手が呼び付けするのでこちらも呼び付けしてみた。
「・・・よろしく、蓮。」
と微笑みながらそう言う。
ドキッっとしてしまった・・。
「お、どうした我が友よ。心臓がバクバクいってるぞぉ？」
「ち、・・・ちげーよ！」
僕は…本当に彼女に一目惚れしてしまったかも知れない・・・。

第3話　瑠璃色の電話

「ただいま～。」
今日は散々だったな。不良といい、刹那といい…。
まあ…あの笑顔は良かったかも…。

「って、何考えてんだ僕は！？」
「レンちゃん？そんなに暴れてどうしたの？」
「ああ母さん。気にしないでくれ。」

ひとまず自分の部屋に入って落ち着くとしよう。
・・・そういえば帰る時刹那が
「帰ったら、電話入れるわ。話したいことがあるから」
って言ってたような・・・。

その時プルル！と電話の音。
「ビクッ！」

「レンちゃん～？電話よ？」
「は、はいはい～。」

ガチャ
「も、もしも～し？」
「あ、蓮？俺だよ俺！刹那だよ！ちょっと交通事故あったからお金振り・・」
「死ねえええええ！！」
ガチャン！

バカかこいつは…。

そして再びプルル！
ガチャ
「おいお～い、分かってんなら切るなよ～。」
「あんな詐欺サルでも分かるわ！！！」
「ハッハッハ。でもまあ今のリアクションはなかなかだったぞ！１００点だ！もう教えることは何もない！」
「なんだ、用件はそれだけか。」
ガチャン。

「はぁ…。無駄な時間だったな。」

プルル！
「・・・おい。」

ガチャ
「やほー、楓だよ。」
「ああ、先輩ですか。ちょっと聞いて下さいよ。さっき裕綺の奴が…。」
「おっと、それ仕組んだの私だから。」
「あんたの仕業か！！！」
「ごめんごめん、刹那ちゃんが電話するって聞いたから、からかいたくなってね。」
「はぁ、先輩らしいすね。だれからきいたんすか？」
「１年Ｃ組の七瀬君。」
「くそー！虎月か！あの野郎…。」
「まあ、詐欺られなくて安心したよ～」
「・・・いや、障害者でもわかりますよ。」
「んっふっふ。じゃあね～」
ツーツーツー。

「さて、そろそろだろう。」
プルル！
「キタ！」

ガチャ
「も、もしも～し？」
「・・・蓮？」
「そうだけど、用って何だ？」
「明日、デートしてくれないか？」

ぶっ！
でででで、デート？
「な、何故そんな急に？いや、俺たちはまだ早いぞ！」
刹那は落ち着いた感じで
「そんなことを言ってるわけではない。慣れておきたいのだ。人と人とのふれあいを…。」
まるでつい最近うまれた赤子のようなことを言う。
だが刹那は暗い感じのイメージがあり、しゃべりもうまくない。
気にしているのか。
「そうか、いいぜ。僕はもっと笑って欲しいと思っているからな。」
「そう・・・ありがとう。」
顔は見えないが、笑っているような感じがした。

「それじゃあ、また明日な。何処に来ればいいんだ？」
「レヴェの塔。」
「あそこか…。なんて珍しいところを。」
「べつにいいじゃない。」
「う～ん。まあいいか。改めてまた明日。」
「また。」

ツーツーツー。

「あらレンちゃん。困った顔をしているわね。」

「デートに誘われたんだよ。俺こういうの苦手なんだ。母さん、何か秘訣はないのか？」

「ふふふ、あるわよ。教えて欲しい？」

「欲しい！」

彼女を笑顔にする為にも、頑張らなくちゃな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4489d/

瑠璃色の刹那

2010年12月31日06時44分発行